

第 2 3 回 テレビ朝日新人シナリオ大賞

応募作品

地球上の

すべてのジュリエットたちへ

蟻の背中

【あらすじ】

これは親子愛と推し愛の物語。

佐藤千穂（50）は乳癌サバイバーの三年目。

二年前に左乳房の全摘手術を受け、現在は再発を抑える治療中である。

たまたま深夜に放送していた韓国ドラマの俳優を好きになり推し活というものを始める。

シングルマザーだった千穂は仕事と育児と生活に追われ、これまで自分のために何かをする時間も余裕もなく生きて来た。

そんな千穂が夢中になれることを見つけ、そこから人との縁が結ばれ新しい世界を知る。

病気のせいで見えない未来と不安で押しつぶされそうだった毎日は、喜びと希望とトキメキのある日々へと変化していく。

しかし息子の健人（25）は、母の推し活をあまり良く思っていないかった。

そんなとき、一か月後のファンミーティングを楽しみにしていた千穂へ、癌の再発が告げられる。

千穂は再発と入院することを健人へ伝えた。

ショックを受けた健人は会社のパソコンで「乳癌・再発」と検索。すると千穂のブログらしきものを発見してしまう。そこにはこれまでの闘病の辛苦が赤裸々につづられていて、自分には見せたことのない母親の姿があった。また、ファンミーティングを楽しみにしている様子も伝わり、母親のためには何かしたいと考える。

健人は千穂と一緒に病院へ行き、主治医に治療をしながら推し活も続けさせてあげたい、と相談するのだった。

一度は諦めたファンミーティングへやって来た笑顔の千穂。

その車椅子を押しているのは健人だった。

【登場人物表】

佐藤千穂（50） アルバイト

佐藤健人（25） 会社員・千穂の息子

諸川理奈（38） ファン掲示板、中の人

コン・ユンソ（30） 韓国の俳優

竹田（65） 惣菜店竹田屋の店主

瀬尾（55） 健人の上司

笹本（48） 千穂の担当医

惟子（58） 同じ病室の患者

看護師（38）

友理奈（35） 公園に来ている母親

真白（6） 友理奈の息子

由衣（33） 公園に来ている母親

ソラ（6） 由衣の息子

有紀（28） コン・ユンソ、又ナ会会員

真帆（23） コン・ユンソ、又ナ会会員

優^ゆ夢^め（23） CDショップ店員

韓国女優（28）

イケメンカフェ店員

コスメショップ店員

○カラオケ店・個室

室内はモニターのみが発光し薄暗い。
テーブル上には空のビールジョッキが
五つ。
カラ揚げや、ポテトフライの皿もなら
んでいるが、それは手つかずのまま。
ブルーハーツの「人にやさしく」のイ
ントロが流れている。
モニターの前に立ち、ヘッドバンキン
グをしながら熱唱する、佐藤千穂（5
0）の後ろ姿。
ポプスタイルの髪が乱れている。
千穂「（熱唱）人は誰でも、くじけそうにな
るもの、ああ、僕だって今だって、叫ばな
ければ、やりきれない思いを♪」

タイトル

「地球上のすべてのジュリエットたちへ」

（二年前から始まる）

○病院・処置室個室

日差しが入る明るい部屋。

点滴の輸液バッグ越しに、黄色く紅葉

したイチヨウの大木と青空が見える。

髪の毛長い千穂（48）病衣姿でベッド

に横になっている。

輸液バッグから腕まで繋がる管。

虚ろな目で、ぼんやり空を眺める千穂。

看護師「眩しいかな、カーテン閉めますね」

看護師がカーテンを閉じる。

閉じると同時に薄暗くなる室内。

看護師「途中で気分が悪くなったり、何かあ

ったらすぐに呼んでくださいね」

千穂「はい、ありがとうございます」

千穂はイヤホンを耳に入れ、スマホを

操作して目を閉じる。

半年後

○商店街・竹田屋前（夕）

黒いキャップを被った千穂、総菜店『竹田屋』の前で足をとめる。店の壁に「毎月5日6日はコロツケの日・半額！」と「アルバイト募集」の張り紙がある。

○竹田屋・店内

油の中で、コロツケが音を立てこんがり揚がっている。

調理用の白衣を着た主人の竹田が、陳列ケース内のトレイへ、コロツケを移し並べている。

他にメンチカツ、トンカツ、串カツ、ササミカツ、うずらフライ、サラダ類、総菜全般がある。

千穂が店の扉を開けて入ってくる。

千穂「お、揚げたて？」

竹田、千穂に気づき、にこやかに迎える。

千穂、揚げ物が並ぶケースを覗く。

竹田「いらっしやい！ 匂いにつられて来たね。散歩の帰り？」

千穂「うん、お天気が良くて。ちよつと歩いてみた」

竹田「いいね。歩いてみたらお腹が減った、それは元気な証拠ってことだ」

竹田は陳列ケースの扉を閉じる。
千穂と竹田、和やかに見合う。

竹田「で、今日は何にする？」

千穂「久しぶりにコロツケが食べたいなって思ってるけど」

竹田「はいよ、懐かしのコロツケ、いくつ？ 百個くらいか？」

千穂「（にやりと笑い）あー、じゃあ、三百個？」

竹田「（にこにこして）三百個ね」

千穂「百個はすぐ食べるので。あとお茶も」
千穂、冷蔵棚からお茶を一本持ってきて、レジに置く。

竹田「はい、あとお茶ね」

千穂、プラパックに入った商品を受け取り小ぶりのトートバッグにしまおう。竹田と挨拶を交わし出ていく。

○団地全景

古びた団地群。

若葉が芽吹く緑の多い敷地内。

歩道をゆっくり歩いている千穂。

○団地敷地内の公園

千穂、公園のベンチに座り、コロツケを頬張っている。

幼稚園児ら2人が遊んでいて、傍で母

親の友理奈（35）と、由衣（33）

が幼稚園のバッグを持って立ち話中。

友理奈がスマホに目をやる。

友理奈「あっ、もうこんな時間」

由衣「今日、スイミングだっけ？」

友理奈「そうなの。真白、準備するのに時間がかかるところから。夕飯の支度もやっておかな

きやいけないし」

由衣「忙しいよね、まだここからがさ」

友理奈「ほんと。マー君、もう帰るよー！」

由衣「ソラも、帰るよ！」

砂場にいる真白（6）とソラ（6）。

砂山に木の枝を何本も刺して無邪気

に遊んでいる。

真白「えー、やだー！」

ソラ「まだ遊ぶー！」

友理奈「また明日遊べるよ！」

由衣「明日また遊ぼうね？」

真白、立ち上がり母親に駆け寄る。

真白「ほんとに、約束だからね？」

友理奈「わかったって」

真白「じゃあ、ソラ、明日またね」

ソラ、木の棒を集め抱え込んでいる。

友理奈「じゃあ、ソラ君また明日ね！」

ソラ「バイバイ！」

ソラ、手を振った瞬間に木の枝を落とす、がまた拾い集める。

真白「バイバイ！」

お互いに手を振り別れる親子達。

真白「今日のご飯なに？」

友理奈「何にしようかな、まだ決めてない」

真白「じゃあ、ハンバーグ！」

友理奈「うーん、ハンバーグかー」

友理奈と真白、千穂の前を通り過ぎる。

コロツケを食べ終わった千穂、ウエットティッシュで手を拭く。

トートバッグから、お茶のペットボトルを取り出し、蓋を開けようとするが力が入らず開けられない。

手をブラブラと振り、グーパーを数回繰り返してから、再び挑戦するがやはり開けられない。
千穂はため息をつき、ペットボトルをトートバッグにしまう。

○ 団地外観（夕）

○同・階段（同）

千穂、階段をゆっくり上がっている。
踊り場で一息入れ、景色を眺める。
空は淡い茜色。

○千穂の家・団地室内・リビング（夕）

3kの狭い部屋。
リビング正面にキッチン、リビング左
隣に和室、キッチン脇に玄関。
キッチンとリビングへ差し込む西日。
リビング外のベランダには男女の洗濯
物が干したままになっている。
窓際にある観葉植物、葉枯れしている。
鍵を開ける音、玄関へ入ってくる千穂。

○同・玄関（同）

千穂、キャップを脱ぐ。
ベリ―ショートのを髪を、壁の鏡を見て
サッと整え、靴を脱ぐ。

○同・キッチン（同）

千穂、冷蔵庫を開け麦茶のボトルを抱えて取り出す。グラスへ麦茶を注いで飲み干すと、グラスをシンクの中へと置く。

○同・リビング（同）

ソファへ倒れこみ、天井を仰ぐ千穂。やがてゴロリと起き上がり、テレビをつけザッピングを始める。

○同・リビング（夜）

千穂、ウトウトしている。室内はほんのり暗い。テレビのリモコンが手から滑り落ちる。千穂、テレビの光が点滅している中で寝ている。

テレビでは韓国ドラマが放送中。ドラマチックで壮大な挿入歌の音楽でパチリと目覚める千穂。

テレビ画面にコン・ユンソ（30）の顔が大きく映っている。千穂、ソファからゆっくり下りて四つ足でテレビに近づいていく。

○画面内の韓国ドラマ・崖っぷち

崖にぶら下がる、韓国女優（28）、その女優を逞しい腕で引っ張り上げようとしているコン・ユンソ。ユンソのシャツは血に染まっている。腕から手の甲へ血が流れ出る。

韓国女優「（韓国語の台詞）」

T「離して、もういい！」

滴り落ちるユンソの血。女優の手にユンソの血が流れる。

コン・ユンソ「（韓国語の台詞）」

T「知ってるだろ？俺がとことん諦めの悪いやつだっただってこと！」

ユンソはガツと力強く女を引き上げる。崖上で強く抱き合う二人。

○元の室内・リビング（夜）

正座をして画面に見入っている千穂。
韓国ドラマが終了し、CMになる。

千穂「えっ、ちょっと待って、誰？　今は誰ですかっ！」

千穂、リモコンで番組表を呼び出し、ドラマ名を確認する。

千穂「愛のブリッジ！」

千穂スマホでドラマ名『愛のブリッジ』を素早く検索する。

千穂「コン・ユンソ！」

千穂のスマホ画面からコン・ユンソの写真が溢れだす。

千穂「コン・ユンソ、やばい……」

○同・リビング（夜）

上下スウェット姿の千穂、床に座り、ノートパソコンを開いて見ている。
扉の鍵が開く音。

扉が開き閉まる音。

スーツ姿の健人（23）が入ってくる。

健人「ただいま」

千穂「おかえりー」

千穂、パソコンを閉じる。

千穂「ごはんはー？」

健人「食べてきた」

リビングからベランダへ出ていく健人。

洗濯物を取り込み入ってくる。

洗濯かごを千穂の横へ置く。

千穂「忘れてた、ごめんねー」

健人、玄関隣の自室へ。

千穂、洗濯物をたたみ始める。

シームレスブラジャーを、ソファテー

ブルの上に広げ、左胸へ厚いパッド

を差し入れる。

健人の声「母さんは？　なんか食べられた？」

千穂「食べたよ。竹田屋のコロッケ、健人の

分もあるよ」

健人、Tシャツとトランクス姿でキッ

チンへやってくる。

健人「どこ？」

千穂「テーブルの上」

二人掛け食卓テーブルに、コロツケが二個入ったブラパックが置いてある。

健人「旨いよな。竹田屋のコロツケ」

健人、パックからコロツケを取ってそのまま美味しそうに食べる。

千穂「そういえば健人、ハンバーグって好きだったっけ？」

健人、洗濯物の中からバスタオルを拾い肩にかける。

健人「ハンバーグ？　なんで？」

千穂「なんかさ、健人の小さい頃思い出して、今度作ろうか？」

健人「いいよ、今はそんなでもない」

千穂「ええ？　そうなの？　じゃあ何が好きなのよ？」

健人「うーん、餃子かな。母さんの作った餃子、なんかうめえんだよな……」

千穂 「餃子かあ」

健人 「あっ、別に作ってくれなくていいよ」

千穂 「なんでよ」

健人 「だって面倒じゃん？ 作んの」

千穂 「面倒かい、そうだね、ごめん」

健人 「なんで謝ってんの？」

千穂 「なんか今、むやみに気を使わせた気が

した」

健人 「別に使ってねえわ。風呂行ってくる」

OC D ショップ店頭

店頭には若い女性らの列が二十人程度出てきている。

ハットを被った千穂、その列の一番後ろに並ぶ。

千穂の後ろに諸川理奈（38）が並ぶ。

理奈 「やだ、もうこんなに並んでる」

千穂、ちらりと後ろを振り返る。

千穂と理奈、目が合いお互いに微笑む。

理奈 「あ、どうも。おはようございます」

千穂「おはようございます」

理奈「ユニソ、日本でも人気出てきましたよね、嬉しいような、困るようなあ」

千穂「長いんですか？ ファン歴」

理奈「そうですね、実はアイドルの頃から追ってるんですよ、私」

千穂「すごい、じゃあ長いですね。一〇年くらいですか？」

○同・店内

店の片隅に特設スペースが設けられ、店員の優夢（23）が立っている。

長机の上にはクジが入ったボックス。

ユニソのトレーディングカード、タオル、サイン入りポラロイド、DVDや等身大パネルなどのグッズが並ぶ。

列の先頭がボックスに入れ、クジを引く。

列が進み千穂の番。

千穂、優夢に引き換え券を見せる。

優夢 「はい、一回どうぞ」

理奈 「（口パクで）頑張って！」

理奈、ガッツポーズを千穂へ送る。

千穂 「よしっ」

千穂、箱からクジを引き優夢へ渡す。

優夢がクジを剥がす。

優夢 「あっ、おめでとうございます！ C賞

です！」

千穂 「うっそ！」

理奈 「凄い！ おめでとうございます！」

千穂 「ありがとうございます！」

優夢 「配送しますので、こちらにお名前とご

住所をお願いします」

千穂 「ああ、配送、そっか」

優夢 「次の方、お待たせしました、どうぞ」

千穂 「頑張ってる！」

理奈 「A賞来い！」

理奈、引いたクジを優夢へ渡す。

千穂、理奈の前で待っている。

優夢 「残念賞です」

優夢、外れ券を理奈へ返す。

理奈「外れたかあ」

千穂「なんだかすみません」

理奈と千穂、出口へ向かい歩いていく。

理奈「えー、なんで謝るんですか？」

千穂「だって、私なんてついこの前ファンになつたばかりなのに、古参の方を差し置いて、申し訳ないような」

理奈「ファン歴？　そんなの関係ないですよ、同じ人を好きになつた者同士、仲良くしましょうよ」

○ 同・店頭

店から出てくる二人。

店頭で話し始める。

千穂「ユンソファンの方は優しいんですね」

理奈「はい。ユンソファンはみんな優しくして平和ですよ。あつ、もし良かったら、私ペンカフェをやってみて」

「※ペンカフェ公式、または個人ファン

が運営するウェブ上のサイト」

理奈は鞆の中に手をつ込み、名刺入れを取り出す。

理奈、千穂へ名刺を丁寧に差し出す。

「コ・ユンソ☆又ナの会

代表 師岡理奈

<http://kong.yunseo.noona.no>

kaijapan.jp」

千穂「えっ、やだ！ 知ってます！ 理奈さ

ん？ うそっ、どうしよう、毎日覗いてま

すよ、このサイトお！ やだ、理奈さんだ

びつくり！」

理奈「うわあ、ホントですか？ それは嬉し

いです」

千穂「ユンソの綺麗な写真がたくさんあるし、情報も早いし」

理奈「じゃあ、センイルの広告掲示は……」

「※センイルⅡ誕生日・推しの生まれた聖なる日」

千穂「ああ、もちろん知ってます。でも、ち

よつと迷ってて」

理奈「えー、どうしてですか？」

千穂「だって、恥ずかしいっていうか、こんなおばさんがファンなんて、迷惑かなとか」

理奈「全然恥ずかしくないですよ、又ナの会ですもん、それに名前が出るだけですから、ぜひ参加してください！」

T「※又ナは男性から見ても年上のお姉さんのこと・又ナ年齢に上限なし！　は暗黙の了解」

千穂「いいんでしょうか、本当に」

理奈「さつきも言ったんですけど、資格はユニソ好きって、もうそれだけでオツケーですから！」

千穂「じゃ、帰ってから申し込みさせて頂きます」

○千穂の家・リビング

千穂、テレビでユニソのドラマ鑑賞中。

玄関のチャイムが鳴る。

慌てて出ていく千穂。

×

×

×

千穂、エアキャップに包まれた大きな看板のような物を、大事そうにリビングへ運んでくる。

○同・リビング（夜）

月明りに照らされているリビング。鍵を開ける音。

健人が玄関へ入ってくる。

○同・キッチン（夜）

濡れ髪にスウェット姿の健人、冷蔵庫から缶ビールを取り出し飲み始める。ふと、リビングに目をやる健人。突然ビールを吹き出し、驚き怯える。リビングの窓際、観葉植物が無くなり、そこに黒い人影がある。

健人「えっ、えっ、え？ どちら様？」

健人、電気のスイッチを慌てた様子で

探す。

電気が灯る。

明かりの下、優しく微笑むユンソ等身大パネルが現れる。

健人「誰え？」

健人、慌てて和室の襖を開ける。

○同・和室

千穂、布団にくるまれ、いい顔で寝ている。

静かに閉められる襖。

○同・リビング

腕組みしながら、パネルを眺めビールを飲む健人。

健人「誰なんだよ」

健人、パネルにスマホを向け写真を撮る。

健人「まったく」

健人、スマホで画像検索をする。

健人「コ・ユンソ？ 韓国人の俳優、182センチもあんのかよ、でけえはずだわ」

○新大久保・公園

千穂、ベンチに座りスマホを見ている。
ベレー帽の下から少し伸びた髪が覗く。

理奈「千穂さん！」

理奈が千穂の前に立つ。

千穂「理奈さん、お久しぶりです！」

理奈「待ちましたか？」

千穂「いいえ、今来たところですから」

理奈「じゃあ、行きましようか」

○カフェ・店内

木の温もりを感じるお洒落なカフェ。
店内はユンソの誕生日を祝う飾りと、
ディスプレイ。
壁にはユンソのパネル写真。

店員「お待たせしました」

テーブルに『Happy Birthday yunseo』

と名前が入ったパステル調のカラー
ルなセニルケーキをイケメン店員
が運んでくる。

T 「※セニルケーキⅡ推しの誕生日を祝う
個人発注のケーキ」

千穂 「わー、カラフルで可愛い！」

理奈 「写真撮らなきゃ、千穂さん、はい笑っ
て」

理奈が一眼カメラをかまえる。

千穂 「やだ、私も？ ケーキだけで……」

理奈 「いいから、はい、はっぴー」

シャツ音が連続で鳴る。

理奈 「千穂さん、きようお」

千穂 「やだあ、何言ってるの」

T 「※クイヨオⅡ可愛いの意味」

モニターを覗き、笑い合う二人。

理奈 「ちよつと、お店の人と話してくるね」
千穂、頷き理奈を見送る。

少しだけ紅茶を飲み、他のテーブルへ
目をやる千穂。

周りは若くて綺麗でお洒落な人ばかり。自分のおばさんっぽい格好を見て苦笑する。

○新大久保・コスメショップ店前

韓流ファンで賑わう通り。

千穂、コスメショップ前で立ち止まる。混雑している店内。何度か行ったり来たりを繰り返す。千穂、団体の客の後ろにくっついて、店に入っていく。

○コスメショップ店内

千穂、ユニソのポスターの前で止まる。綺麗な色のリップグロスが並んでいる。千穂、悩んでからそのひとつを手に取り、手の甲へ出して眺める。

コスメ店員「そちらは一番人気のお色ですよ」

千穂「あっ、すみません」

コスメ店員「何かお探ですか？」

千穂「ええと、そうですね。なるべく肌に負担の少ない化粧品はありますか？」

コスメ店員「それでしたら、こちらのシリーズ
ズなんかどうでしょう」

○ コスメショップ店頭

微笑みながらショップから出てくる千穂、手にコスメショップの紙袋を持っている。

○ 千穂の家・和室（夜）

スヤスヤといい顔で寝ている。

○ 同・リビング

薄暗い部屋。

玄関の鍵を開け入ってくる健人。

× × ×

健人、風呂上りで、ビール片手にリビ

ングを眺める。

等身大パネルの横に、新しく棚が出来

ているのに気づく。

棚にはユニソのグッズや韓国雑誌が。

ソファテーブルの上にも、NOK韓国語

講座（ユニソが表紙）の本が置いてあ

る。

健人、ソファに座り本をペラペラとめ

くる。

○同・健人の部屋

ベッドで寝ている健人。

千穂の声「ぎゃー！！！」

千穂の叫び声に飛び起きる健人。

上体を起こし、キョロキョロ辺りを見

回し、ベッドから起き上がる。

○同・リビング

ソファの上で正座しスマホを見つめて

いる千穂。

健人、キッチンへ入ってくる。

健人「なに？　大丈夫なの？」

千穂 「え？」

千穂、スマホの画面から目を外さない。

健人 「すげえ声、出してなかった？」

千穂 「ええ？ そうだった？」

健人 「どつか悪いのかと……具合」

千穂 「ああ、ごめん、起こしちやった？ 今

日休み？」

健人 「うん。……もう一回寝るわ」

千穂 「おやすみー！」

喜びを隠しきれず、大はしやぎしている千穂。

健人 「なに、良いことあった？」

千穂 「あったの、あった。一万年ぶりに、あ

ったよお！」

健人 「その、ウンソって人の件？」

等身大パネルをアゴで指す。

千穂 「えっ？ 健人、ウンソ知ってるの？」

健人 「別に詳しく知らんけど」

千穂 「ねえ、ねえこれ見てよお、ウンソにセ
ンイル広告、あっお誕生日をお祝いする広

告ね、認証ショットが来たのよお！」

健人「認証ショット……？」

T「※認証ショットIIファンからの贈りものと一緒に写真を撮り、SNS等でお礼を言う行為」

千穂「韓国の地下鉄の駅に出したんだけど、あっ、私がじゃなくて、ペンカフェがね。で、ほらここに、CHIHOTってあるじゃん、そこに、見て！ 注目っ。ユンソの指が当たってる！ 凄くなーい？ やっぱつくないですかっ、これっていう話よ」

千穂、健人に写真を見せる。
拡大された壁面広告の写真。
大きなユンソの顔の前にユンソ本人が立ち、MAHO、NAGI、YUKIなど名前が並ぶ一角を指さしている。
CHIHOTの名前の上に、ユンソの指が当たっている。

千穂「来たわー、奇跡のミラクル」

健人、眠そうに頭をかく。

健人「寝るわ」

千穂「健人、私アルバイト始めるから」

健人「え、そうなの？どこで？」

千穂「竹田屋さん、夕方二時間くらいでいいんだって」

健人「ふうん。あんま無理すんなよ」

千穂「はい」

千穂スマホの画面を見ながらニヤつく。

○健人の会社・カフェテリア

一人で定食を食べている健人の向かいに瀬尾（55）が座る。

瀬尾「はい、おみやげえ」

瀬尾が健人の前に韓国の菓子を置く。

健人「韓国、行ってたんですか？」

瀬尾「そうなの。奥さんが韓国ドラマにはまっちゃって、ロケ地巡礼の旅？っていうのに付き合わされてさあ。年甲斐もなく、参るよな」

健人「瀬尾さんともですか？実はうちの

母親もなんですよ。いい歳して浮かれちゃ
って、恥ずかしい」

瀬尾「家帰っても、ドラマに夢中で俺に気づ
かんのよ？ で、飯は？ って聞くと、自
分で温めて食べって」

健人「家の中に写真パネルあるんすよ、等身
大のやつ。ウチ狭いのに、そんな邪魔で
しかないわけ」

瀬尾「突然、韓国語で話しかけてきて、ヨボ、
アンニョンとか？ チンチャ、とか、ここ
は日本だぞ？」

健人「SNSで知り合った、得体の知れない
人間を友達だっけって言い出すし」

瀬尾「まっ、そのうち飽きるだろうと思っ
いたら、今度は旅行に連れて行ってきたも
んだ」

健人「こっちはいろいろ気を使って心配して
るってのに」

瀬尾「あれ、飽きられたのは俺のほうか？」
二人同時にため息をつく。

瀬尾「まあ、食べ。この菓子、旨いんだ」
瀬尾、菓子をもうひとつ並べて置く。

一年半後

○千穂の家・リビング

千穂（50）の髪が肩まで伸びている。

健人（25）ソファに寄りかかり真剣にゲームをしている。

ぼんやりソバを茹でている千穂。

ソバが吹きこぼれる。

千穂、我に返り慌てて火を消す。

千穂「健人、ごめんザル取ってくれない？」

健人「えー、ちよっ、今無理かなあ」

千穂「もう、ゲームやめて、朝からずっとやってるじゃん」

健人「ずっとじゃないし、一緒に買い物にも行っただろ？」

千穂「早く！お蕎麦がのびちやう！」

健人「もう、うるさいな」

健人、コントローラーを置いて、キッ

チンへやってくる。

健人「何、ザル？」

健人、吊り棚からザルを取り鍋のソバを移す。

千穂「冷やして」

健人「はいはい」

健人、蛇口の水をソバにあて、かき混ぜる。

千穂「手早く！」

健人「やってんじやん、何イラついてんだよ」

千穂「イラ・ついて・な・い！」

親子、食卓で向かい合い、無言でザルに入ったソバをすすり続けている。

千穂「あのさ」

健人、ソバつゆにチューブのワサビを足している。

千穂「私、再発したんだって」

ワサビがドボツとツユ椀に落ちる。

健人「は？」

千穂「再発したんだって」

健人「え？」

千穂「手術したところにまた」

箸で左胸を指す。

健人「え？」

千穂「来週手術するから、明日から入院」

健人「手術って？ 明日？」

千穂「まっ、しようがないね、出来ちゃった

もんは……取るしか」

勢い良くソバをすすする千穂。

千穂「だから、留守頼みますね」

固まる健人。

千穂「のびるよ、お蕎麦」

健人ソバをすくい飲み込む。

ゴホっ、ゴホっ、とワサビの辛さでむ

せる。

千穂「大丈夫？」

健人「わっ、ワサビがっ」

千穂が健人のコップに水を継ぎ足す。

千穂「ほら、水」

健人、水を飲み涙目で千穂を見る。

健人「ゲホッ、ゲホッ」

○ 健人の会社・オフィス内

昼休み、誰もいないオフィス、自席で

PCに向かう健人。

『乳癌・再発』と検索する。

検索結果をスクロールしていると

【乳癌サバイバー・チホの備忘録】

というサイトを見つけ、ためらいなが

らクリックする。

（千穂回想）

○ 病院・診察室

千穂、笹本医師（48）の隣でレント

ゲン写真を見ながら、ぼんやりと説明

を聞いている。

千穂 M「今日、左胸に再発していることがわかりました」

○ 病院前

病院から出てきて、ぼんやり歩く千穂。

千穂 M「半分はそういう想定もしていたのに、
覚悟はひとつも出来ていませんでした」

○カラオケ店・室内

ビールをガブ飲みする千穂。

千穂 M「何が悪かったんでしょう？ 手術も

治療もちゃんと受けたのに」

二杯目のビールを飲む千穂。

千穂 M「それとも、これまでの私の人生が何か間違っていて、それに対しての罰を受け
ているのでしょうか？」

三杯目のビールを飲み干す千穂。

千穂 M「理由を教えてください。次からは絶対
にそれをしません。約束します」

ブルーハーツの「人にやさしく」のイントロが始まる。

立ち上がり画面の前に立つ。

千穂、頭を振り熱唱する。

千穂「（歌）人は誰でもくじけそうになるも

の、ああ、僕だって今だって、叫ばなければやりきれない思いを♪」

泣きながら熱唱している千穂。

千穂「でっかい声で言っただけでやる、がんばれな
いって言ってやる！ 聞こえるかつ、ふざ
けんなあ！」

○カラオケ屋のトイレ個室内

千穂、便器に向かい吐いている。

トイレトペーパーで口と顔全般を拭
きながらケラケラ笑い出す。

やがてその声は嗚咽に変わる。

千穂 M「久しぶりにビールを飲んで、歌いま
した。まったく酔えなくて、しらふで。吐
いてもすつきりせず前を向けません。怖く
て仕方がないんです」

○千穂の家・リビング

千穂、ノートPCに向かい文字を打っ

ている。

千穂 M「皆さんは、この怖さにどうやって向き合ったんですか？ 私は、逃げられるなら今すぐ逃げたいです」

○ 竹田屋・店前

アルバイト募集のチラシを貼る千穂。
千穂 M「ユニソのファンミーティング、行きたかったのに。ユニソに会いたかったな。残念ながら、今回は見送りになりそうです。私に次があればいいのですが」

ブログ内掲載の写真

地下鉄セニール広告とユニソの写真

セニールケーキとこやかに笑う千穂
ファンミーティングのチケットの写真

○ 同・店前

千穂、チラシを貼り終え、空を眩しそうに見上げる。

幼稚園帰りの、友理奈と真白が通りかかる。

真白「ママ！ コロツケ食べたい！」

友理奈「コロツケ？」

真白「今日、コロツケの日だよ」

真白、コロツケの日のポスターを指さす。

千穂「いらっしやいませ、コロツケの日はコロツケが半額になるんですよ」

友理奈「え、半額！ それはお得」

真白に手を引かれ友理奈が店に入っていく。

注文を聞き、パツクにコロツケを四つ入れる千穂。

千穂「ありがとうございます」

仲良く手を繋いで帰っていく友理奈と真白。

千穂、微笑みながら見送る。

千穂 M「今日、息子に再発したと伝えました。出来るだけなんでもないように、上手く出

来たと思う。心配症の息子なので」

（回想終わり）

○ 健人の会社・オフィス内

健人、無人のオフィスでポロポロと泣いている。

○ 千穂の家・リビング

千穂、入院の準備をしている。

玄関の扉が開き、健人が入ってくる。

玄関を覗き、千穂は驚く。

千穂「あれ？ 仕事は？」

健人、千穂の前に立つ。

健人「早退した。病院、一緒に行くから」

千穂「え、大丈夫だよ。健人がいてくれたって、どうなるってもんじゃないし。手続き

なら自分で出来るから」

健人「いいいから、先生と話したいことあるし。

荷物それだけ？」

千穂「うん、まあ」

健人「持つよ」

千穂「なんか忘れてないかな、保険証」

千穂はシヨルダーバッグの中を確認する。

健人「俺には母さんしかいないんだよ」

千穂、バッグの中を覗いたままとまる。

健人「家族。母さんだってそうだろ？ あい

つは家族じゃないんだから」

健人、ウンソのパネルをアゴでさす。

千穂「なに、やきもち？」

健人「いいいから。：：言えよな、なんでも。

もつと頼ってくればいいじゃん。息子なんだから」

千穂「ごめん」

健人「だから、そうやって謝るなって、なんも悪くないだろ？」

千穂「悪いよ！ こんな病気になって。なんにもしてあげられない。ごはんだって、家

事だって、お金だってかかるのに」

健人「そんなの、俺がやるからいいんだよ、
任せてくれれば」

千穂「今までだって、私のせいで苦労しかさ
せてない」

健人「母さんのせいじゃない。そんなこと思
ってない」

千穂「これからだってさ」

健人「これからも、何でも言っつてよ」

千穂「これからも：：」

健人「俺は、頼りがいのある息子になりたい
んだ」

千穂「健人：：」

健人「でも、まあ、言っつちやえば、家事は小
5から俺がやってたんだけどな」

千穂「そうね、そうでした」

○病院・六人部屋病室内

千穂、ベッドサイドのチェストに洗面
用具などの荷物をしまっている。

最後にユニソのアクリルスタンドとト
レカの入ったデコケースを飾ってしば
らく眺める。
向かいのベッドへ点滴を繋いだままの
惟子（58）が戻ってくる。
千穂「こんにちは、佐藤です。よろしくお願
いします」

惟子「サイドテーブルの写真に気づく。
惟子「こんにちは、あら、ご主人？」

千穂「あはは、違いますよ。好きな韓国の俳
優さんなんです」

惟子、眼鏡をかけ近くに寄り写真を見
る

惟子「素敵な人ね、イケメンだし」

千穂「そうなんです、素敵な人なんです」

惟子「夢中になれることがあるってのは、い
いことね」

千穂「はい」

惟子「特に私たちには」

千穂「私たち？」

○病院・カウンセリング室

医師の笹本（４８）と向かい合って座
っている健人。

笹本「今回、手術するのは前回手術で切除し
た場所の少し上、胸壁と呼ばれるこの部分
です」

笹本が図を描いて説明する。

健人「手術すれば大丈夫なんですか？」

笹本「お母さんの場合、他の場所への転移な
どは見つかりませんでしたので、いったん
この部位を取り除き、その後は放射線治療
か、薬物療法で様子を見ていくことになり
ます」

健人「あの、手術後なんですが……」

笹本「何か心配なことがありますか？」

健人「手術後にコンサートへ行くことって可
能でしょうか？」

笹本「いつですか？ コンサートは」

健人「一か月後なんですけど」

笹本「なるほど」

健人「すごく楽しみにしていたみたいなので、出来れば行かせてやりたいんです」

笹本「そうですね。ではお母さんと治療方法の相談をして、元気に、というのは難しいかもしれないけど、体調がいい時に行けるよう、治療のスケジュールを組んでみましょう」

健人「ああ、行けるんですね？　コンサーに。良かった。ありがとうございます。とても喜ぶと思います」

健人、笹本に何度も頭を下げる。

笹本「いいえ、それがお母さんの励みにもなりますから、これからも支えてあげてください。一人で堪えるのが一番良くないですから」

健人「はい、よろしくお願いします」

笹本「他にも何かあったらどんなことでも、我慢せず、スタッフでもいいので相談してください」

○同・千穂の病室

病室に入ってくる健人。

千穂、スウェット姿で惟子と雑談中。

惟子「あら、息子さん？」

健人「どうも、母がお世話になります」

千穂「ね、愛嬌のある顔はしているんだけど、

イケメンていうのとは程遠いでしょ？」

健人「そうかよ、ウンソみたいなのが息子だ

ったら良かったな」

惟子「あらら、拗ねちゃって」

千穂「まあまあ、ほらそこ座って、バームク

ーヘン頂いたの」

健人、ベッドサイドの丸椅子に座り、

千穂からバームクーヘンの小袋をもら

う。

健人「ありがとうございます」

健人、惟子に礼を言い、バームクーヘ

ンの小袋を手の中で持て余すように転

がす。

惟子「あんまり心配することないわよ」

健人「え？」

千穂「惟子さん、私と同じなの、先輩」

惟子「そうよー、もう一〇年近くここを行っ

たり来たり。もう又シって感じ？」

クスクスと笑い合う千穂と惟子。

健人、複雑な顔でバームクーヘンの袋を破き、中身をかじる。

○ファンミィーティング会場ホール・外観

○会場・ホール内

出入口の脇には祝いのスタンド花や風船スタンドなどがずらりと並ぶ。

ロビー内には、お洒落をした多くの女性客。

自動扉が開き、車椅子に乗った千穂が入ってくる。

千穂は治療で抜けた髪型を隠すためシヨートヘアのカツラをかぶりマスク

をしている。

綺麗に化粧されている目元。

千穂、青っぱいクマのかたちをした風船スタンドを指さし、車椅子を押す健人に示す。

健人「あれか」

スタンドの前で理奈が手を振っている。

理奈「千穂さん！」

千穂「理奈さん、久しぶり！」

理奈、腰を折り千穂の手を握る。

理奈「会いたかった！」

千穂「私も会いたかった」

理奈「ずっとオフ会で話してるからか、あんまり

まり会ってない感じではないけど」

千穂「そうだね、でも顔を見て話すのがやっ

ぱりいいよ」

理奈「わ、綺麗なネイル。可愛い！」

理奈、千穂のネイルを見て驚く。

千穂「今日は特別な日だから、初めてネイルに挑戦してみたの」

理奈「ユニソカラーのブルーとドラマに出てくるスズランの花だね、とっても素敵！」

千穂「そうなの。あっ、そうだ、息子の健人」

千穂、思い出したかのように、後ろの

健人を理奈へ紹介する。

理奈「こんにちは、理奈です」

健人「はじめまして、いつも母がお世話になってます」

理奈「やだあ、お世話って。こちらこそいつ

も楽しくお話させてもらってるんです」

千穂「ほんとに素敵なスタンドになったね」

千穂、風船スタンドを見上げる。

大きなクマの形に作られた風船アート。

ブルーと白のグラデーションで出来ている。

リボンとハートをかたどったボードに

『20××年6月26日

コン・ユニソ

ジャパンファンミーティング

又ナの会一同』のタイトル

その下には多くの会員の名前が連なっている。

理奈「私たち、ウェブで何度も集まって話し合ったからね」

千穂「最初しか参加出来なかったけど、想像してたとおりの仕上がりだよ」

理奈「千穂さんの名前は、ここね」

最初の列にC H I H Oの名前がある。

千穂「ありがとう。ねえ、健人、写真撮ってくれない？」

千穂、健人にスマホを手渡す。

理奈「じゃあ、これでもお願いします」

理奈、健人の首に一眼カメラをぶら下げ風船スタンドの前に立つ。

健人、車椅子を押し千穂を風船スタンドの前に連れていく。

健人「じゃ、撮りますよー」

健人、しゃがんだり立ったりして何枚か写真を撮る。

スタンドの前でこやかに笑う千穂と

理奈。

有紀「理奈さん！」

有紀（28）と真帆（23）が駆け寄
ってくる。

有紀「千穂さんも！」

千穂「ええと、有紀さん？」

有紀「有紀です。ウェブでのオフ会ではいつ
もお会いしてましたけど、やっとお会い出
来ましたね！」

真帆「こんにちは。千穂さん！初めまして

真帆です」

千穂「わー、真帆さんも、オフ会ではいつも
楽しいお話で笑わせてもらってました」

和気あいあいとおしゃべりする四人を
やや遠くから見ている健人。

○同・会場内

イベントが始まり、千穂は車椅子用の
席でユニソを見ている。
健人は隣の席で千穂の顔を見ている。

ユンソが歌ったり踊ったり、ゲームを
したりと何をするにも歓声があがる。
始終、眩しそうにユンソを見ている千
穂。

○同・ロビー・会場扉前

ユンソ、扉の前に立ちお見送り会。
一輪の赤いバラを一人一人に手渡しな
がら見送る。
ファンは一列に並び花をもらうと、笑
顔で別れていく。
その列に並んでいる千穂と健人。
千穂の番になると、ユンソが片膝を付
き千穂の目線で微笑む。
ユンソ「今日は来てくださって、本当にあり
がとうございました」

千穂、ユンソから花を受け取り彼を見
つめる。

ユンソ「綺麗なネイルですね」

千穂「あっ、そうなんです。今日のために」

ユンソ「僕のためですか？　ありがとうございます
います」

千穂「こちらこそ。いつもありがとうございます
ます。ああ、胸がいつぱいで……」

ユンソ「また、すぐにお会いしましょう」

千穂「はい、またすぐに！」

千穂、ユンソに手を振る。

車椅子を押して、去ろうとする健人。

ユンソ「あっ、待ってください」

健人立ち止まり、ユンソの方へ向き直
る。

ユンソ「今日は来てくださって本当にありが
とうございました。気をつけてお帰りくだ
さい」

ユンソからバラの花を貰う健人。

じつと、ユンソの顔を見る。

ユンソ、にこりと微笑み深くお辞儀を
する。

健人もつられてお辞儀を返す。

健人が顔を上げると、再び微笑むユン

ソと目が合う。

ポーっとユンソを見上げる健人。

千穂「健人、後ろがつかえてるって」

千穂、ユンソから目を離さず健人を促す。

健人「ああ、ああそうか」

健人、バラの花を千穂に渡して、車椅子を押す。

ユンソ「さようならー、お気をつけて。ありがとうございました」

ユンソ、にこやかに手を振り二人を見送る。

○車中・（夜）

ハンドルを握る健人。

後部座席でいい顔で寝ている千穂。

健人、ミラーでその顔をチラ見。

健人「いい顔して寝てるな」

千穂「健人」

健人「（驚いて）なんだ、起きてたのか」

千穂「ユンソ、カッコよかった。この世に本当に実在してたんだね。しかも手の届く距離に、いた」

健人「そうか？ まあまあまあだったけどな」

千穂「ネイル、褒められちゃった」

健人「良かったじゃん」

千穂「健人」

健人「ん？」

千穂「ありがとう。今日はほんとに」

健人「ああ、まあ、良かったよ。俺もいろいろ。ファン仲間？ っていう人にも会えたし……。あれだな、向こうの俳優ってのは、何でも出来んだな。歌ったり踊ったり、日本語で話したり？」

千穂「ありがとう」

健人「なんだよ、何回も」

千穂「次は韓国でユンソに会いたい」

健人「だよな。行こう韓国」

千穂「うん」

微笑み目を閉じる千穂。

○千穂の家・リビング（夜）

静かな家の中。

月明りが差し込むリビング。

食卓テーブルの上には一輪挿し。

寄り添うように挿してある二本のバラ。

了

本文
5
5
枚